

上郡町の偉人

大鳥圭介

「鵬程万里」第十七回

著者 中川由香

仏教は「貪(貪欲)」「瞋(怒り)」「癡(愚か)」を三毒とし、愚痴は愚かな毒であるといわれています。有言実行の典型のような人生を歩んだ圭介も、そんな愚痴と無縁というわけではありませんでした。

戊辰戦争を記した圭介の凄惨な記録「南柯紀行」には、愚痴が溢れています。特に北関東や会津の戦いでは、優勢の新政府軍に圧され、武器弾薬も食糧も尽き、兵は疲れ果て、藩や徳川家の姿勢に翻弄され、道なき山野での泥沼の戦いが続きました。圭介は漢学の素養による表現力を駆使し、愚痴を書き綴っています。江戸脱走後、宇都宮で敗戦し日光を経て会津にたどり着くまでの圭介の記述をご紹介します。

宇都宮の苛烈な戦いの後「山道夜を浸して歩行、疲労は例えられるものなく、一步も進めない」、その状態で部下が次々傷つき「本多も柿沢も深手を負い相談相手が無く甚だ困却」します。不足した弾丸を自作させましたが、「製作良くなく軍用に使えず、いよいよ困窮。輸送補給の大切さは書物でも心得ていたがこの混乱状況の間ではいかんともしがたい、嗚呼」と嘆きます。

圭介は、防御しやすい峻嶒な地で、兵の心の拠所にもなる日光に向かいます。しかし、徳川の為に戦い続ける圭介たちに、徳川開祖を奉ったはずの日光が、米も塩も蓄えなく兵に駐屯さ

れては地元民にも僧侶にも迷惑、障らぬ神に崇りなし、どこかへ早く立退けと伝えます。参拝するも圭介は、「神廟は聞きしに勝る美麗壯観だが、兵隊進退のことに心を碎き今後いかなる形勢になるのか悲泣に堪えず、参拝もそこそこにして神前を下った」のでした。

そして圭介は、傷ついた兵と会津へ行くため、険しく一步踏み外せば千尋の深谷の、六方沢を越えます。雨で泥深く、暗夜蠟燭も尽き、大軍で陸続して進むのに難渋。石を枕とし木枝を褥とし、露に濡れて凍え憔悴し果て眠りました。

その苦しみはもはや愚痴という次元をはるかに超えます。どん底で明け方目を覚ました圭介は、「千山万岳の一碧の中に花がある、嬋妍(あでやかで美しい)淡白な姿は、万花に勝る」と野州つつじの群生に圧倒されます。「暁鳥一声、天正に霽る 千溪雪白の野州花」と感動して詠みました。疲弊困憊の極地で絶望に身を浸すほど、森羅は美しく自然は圧倒的に感じ、そこに人の苦難など何ほどのものかと達観を見出すのだと思えます。

さらに苦難と飢餓の道は続き、「実に餓鬼道の有様」。その中、兵が卵二個を持ってきてくれ圭介は感動します。そうして山を越えようやく会津に入領しようとしても「兵を国境に入れるのは迷惑」と追い返されます。もともと会津からは、日光で戦功を賞され御紋付の羽織や酒

肴を送られ、会津よりも兵を出して勢力を合わせる見込みだと伝えられていました。不条理な事だと、愚痴も生じて当たり前です。その後山王峠で、会津の若年寄山川大蔵に会い、今後の百事を打ち合わせ、ようやく安心しました。

苦しい戦はさらに続き、圭介の愚痴も重ねられますが、例えば今市の戦いの後で「敗退は隊を細かく分け過ぎた自分の策略が至らなかつたからである。これを記すのは、敗北を恨むのではなく自分を恥じて後の戒めとするためだ」と述べ自省しました。愚痴の中にも、失敗を糊塗せず、それを認め教訓を得る圭介の建設的な在り方が伺えます。

また降伏後に収監された牢内で記した「獄中日記」では、粗食、暑さ、蚊や蚤、寝苦しさ、境遇の悪さについて愚痴を書き連ねます。その上で「この牢獄は自分が歩兵取り締まりの為に建てたものだが、なんという因果か、今は自分を繋ぐ獄となるとは。己より出たものは己に返る理だ」と述べます。これは圭介が後年も好んで人に伝え、関係者は圭介の人柄を伝えるのになし、しばこのエピソードに触れています。

仏教に言うように、愚痴は言っても仕方ないことで、聞かせられる周囲も気持ちよいことではありません。しかし人間らしさもそこから感じられます。圭介のように重責を背負い苦難にある程、愚痴を言いたい事も多いでしょう。圭介の愚痴はいつも生産的で建設的であり、どこかユーモラスで周囲が笑うようなものでもありません。愚痴の言い方一つにも、圭介の人間性が伺えます。